沖つ白波（大和物語）

昔、大和の国葛城の郡に住む男・女ありけり。この女、顔かたちいと清らなり。年ごろ思ひかはして住むに、この女、いとわろくなりにければ、思ひわづらひて、限りなく思ひながら、妻をまうけてけり。この今の妻は、富みたる女になむありける。ことに思はねど、行けばいみじういたはり、身の装束もいと清らにせさせけり。

かくにぎははしき所にならひて、来たれば、この女、いとわろげにてゐて、かくほかにありけど、さらに妬げにも見えずなどあれば、いとあはれと思ひけり。心地には、限りなく妬く心憂く思ふを、忍ぶるになむありける。とどまりなむと思ふ夜も、なほ「往ね。」と言ひければ、わがかくありきするを妬まで、異わざするにやあらむ、さるわざせずは恨むることもありなむなど、心のうちに思ひけり。

さて、出でて行くと見えて、前栽の中に隠れて、男や来ると見れば、端に出でゐて、月のいといみじうおもしろきに、頭かいけづりなどしてをり。夜更るまで寝ず、いといたううち嘆きてながめければ、人待つなめりと見るに、使ふ人の前なりけるに言ひける。

風吹けば沖つ白浪たつた山夜半にや君がひとり越ゆらむ

と詠みければ、わがうへを思ふなりけりと思ふに、いとかなしうなりぬ。この今の妻の家は、竜田山越えて行く道になむありける。

かくて、なほ見をりければ、この女、うち泣きて伏して、金椀に水を入れて、胸になむ据ゑたりける。あやし、いかにするにかあらむとて、なほ見る。されば、この水、熱湯にたぎりぬれば、湯ふてつ。また水を入る。見るにいとかなしくて、走り出でて、「いかなる心地し給へば、かくはし給ふぞ。」と言ひて、かき抱きてなむ寝にける。かくて、ほかへもさらに行かで、つとゐにけり。

かくて、月日多く経て思ひやるやう、つれなき顔なれど、女の思ふことといみじきことなりけるを、かく行かぬをいかに思ふらむと、思ひ出でて、ありし女のがり行きたりけり。久しく行かざりければ、つつましくて立てりけり。さて、垣間めば、我にはよくて見えしかど、いとあやしきさまなる衣を着て、大櫛を面櫛に挿しかけてをり、手づから飯盛りをりけり。いといみじと思ひて、来にけるままに、行かずなりにけり。この男は王なりけり。

（第百四十九段）